

ヤマト福祉財団 NEWS

ヤマトグループ賛助会員向けニュース(季刊)

発行部数12万部・非売品

YAMATO WELFARE FOUNDATION

No.45

1月20日発行 2015 Winter

第15回ヤマト福祉財団

小倉昌男賞 贈呈式

手間をかけること、
じっくり取り組むこと。
障がい者の強さが農業で輝く



写真前列左より受賞された宮嶋氏令夫人、宮嶋望さん、佐伯康人さん、佐伯氏令夫人。後列左より森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、瀬戸 薫ヤマトホールディングス株式会社代表取締役会長、有富慶二ヤマト福祉財団理事長、神田晴夫ヤマトホールディングス株式会社代表取締役専務執行役員、山内雅喜ヤマト運輸株式会社代表取締役社長

私たちの賛助会費が活かされています

■障がい者給料増額支援助成金 助成先レポートVol.22 (宮城県女川町)

立ち止まることはできない。
水産加工部門、再生までの道程 p08

〔夢へのかけ橋実践塾〕 塾生の挑戦 NO.2
クッキーもつくれる店舗へ 軽食・喫茶の木立 p10

『経済的自立力達成事業所紹介サイト
夢へのかけ橋』を開設しました p11

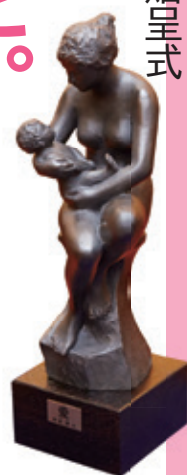
この街で、一緒に生きていく。
障がい者のクローネメール便配達

ミスの原因を考えることで、
失敗も貴重な経験となる。 p12

第15回

ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 贈呈式

手間をかけること、
じっくり取り組むこと。
障がい者の強さが農業で輝く



2014年12月4日／東京・日本工業倶楽部



「これまで正直、僕たちはあまり認めてもらえませんでした。賞状の文言から、僕らの36年をきちんと細かく見て評価して下さったことが伝わり、うれしく思いました」宮嶋 望さん



「ミッションとも言うべき、なにかものすごい大きなものが、宮嶋さんを動かしている気がします」宮嶋さんを推薦した、NPOコミュニティシンクタンクあうず専務理事・菊池貞雄さん



「お二人の業績は小倉昌男賞にふさわしい、たいへん優れた業績であります。審査員一同高く評価しております」選考委員を代表して、一般財団法人厚生年金事業振興団 前理事長・渡辺 修さん

北と西から農業で優れた成果

毎年12月の障害者週間に関われる小倉昌男賞贈呈式。あいにく肌寒い雨がそぼ降る当日でしたが、障がい者の経済的自立にめざましい実績を上げていらっしゃるお二人を、第15回となる今年も大勢の方が讃えました。

受賞されたのは、北海道のほぼ中央に位置する新得町から「農事組合法人 共働学舎新得農場」の代表・宮嶋望さん。もうお一方は、愛媛県松山市郊外で自然栽培による農福連携を展開する「株式会社 パーソナルアシスタント青空」の代表取締役・佐伯康人さんです。期せずしてご両名とも農業分野を手がけられています。

■ 手間暇が生きる職場づくりを

宮嶋さんが、日高山脈の麓で「新得共働学舎」の牧場づくりを始めたのは1978年のことです。町からの申し出で30haを無償で借り受け、6人からスタートし



新得町から町長、町議会議員もお見えになりました

ました。ここに集う人たちの背景はさまざまです。障がい者だけではなく、舞踏病やひきこもりなど、一度は社会に居場所が見つけられなかった人たちが約70名を現在は受け入れています。

新得農場が掲げるモットーは「自労自活」。農場は生活の場であると同時に働く場でもあります。自分たち自身で日々の仕事を決め、仕事を通じてやりがいや自立を促すことに、心を砕いています。

そんな彼らが手間暇をかけて生産した商品は、「新得共働学舎」の名を世界に知らしめています。それは牛飼いかから熟成まで、一貫して手作りで仕上げたナチュラルチーズ。本場ヨーロッパのコンクールに出品した「きくら」は2004年に金メダル獲得の快挙を成し遂げました。

現在はチーズを中心に、有機野菜やパン、ケーキ、工芸品などの販売で2億円超の売上を立て、もともと給料の高いメンバーの月給は6万円の水準に及んでいます。

■ 自然農法で福祉を、地域を再生

障がいのある三つ子を受け取り、福祉の世界に足を踏み入れたという佐伯康人さん。やがて地域に暮らす障がいを持った子どもたちが学び、働く場を見学するようになると、クッキーの製造や下請けなど、どこも同じような作業ばかり。また育児・介護・リハビリを支援してくれる行政サービスも多



「今日の雨は、『このような賞をいただくには、おまえはまだ早い』と天が怒ってるんじゃないかなと思います(笑)」佐伯康人さん



「けっしてユーモアを忘れず、関わる人たちをつねに笑顔にしなが、とうとう東京ドームを超えるような、大きな農地でたくさんの野菜を作るようになった」と佐伯さんを評する推薦人の株式会社ココシマ・津田和泉さん



来賓を代表して「祝辞をいただいた厚生労働省・社会・援護局 障害保健福祉部長の藤井康弘さん



今年も多くの方をお迎えしました

くは、利用者本位より事業所都合が優先しているように映りました。このままでいいわけがない。障がい者一人ひとりと、支援者一人ひとりが向きあい支援するパーソナルアシスタント制度の存在を欧米に知ると、自らB型を行う「パーソナルアシスタント青空」を2005年に立ち上げました。ほとんど支援者より1反の農地を借りたことから、脱下請けの環境として農業に取り組み始めます。当初は慣行農業でしたが、「奇跡のリンゴ」で知られる木村秋則氏の自然栽培と出会い、試行錯誤を繰り返しました。

いまでは佐伯さんたちのつくった自然農法米は、一般の平均卸価格の3倍、じつに730円/kgの値がつくほどの人気です。地域に増える耕作放棄地を活用し、耕地面積は11haに達しました。18人の利用者への月給は、平均5万円を

受賞者には賞状ならびに正賞として、母子のブロンズ像「愛」が贈呈されました。またいつも式典を大いに盛り上げる花田春兆さんも登壇し、お二人を詠んだ俳句を披露。贈句されました。



クリアしています。

相対的貧困線を超えるために

あいさつに立った有富慶二財団理事長からは「お二人のすばらしいところは質の高い商品を開発生産し、お客さんが高いお金を払ってもいいという状況をつくっていること。それが給料をたくさん払えるビジネスを成立させています」と考察。続けて障がい者の置かれている経済的な環境について、「B型の福祉施設では約20万人の障がい者が働いていますが、その平均月給は1万4000円です。いっぽうOECDが定める「相対的貧困線」を日本に当てはめて計算すると、そのラインは

112万円。これは障がい者年金77万円を受給して、月給を3万円もらえれば、なんとかクリアできるという数字でもあります。そうした面から見ても、お二人が率いるところは一段も二段も上を行っている。このすごさを会場のみなさんにもぜひご理解いただきたい」と功績を讃えました。贈呈式のあと、参加者はフロアを移し、華やかな雰囲気の中で親交を深めました。



(左から) 受賞者の佐伯康人さんと奥様の恵さん、宮嶋望さんと奥様の京子さん



受賞者を訪ねて

徹底した最高品質への こだわりが鍵

北海道の大地で障がいのある人と国内外で最高品質と
評価の高いナチュラルチーズを生産している宮嶋さんを訪ねました。

柔らかな日差しの中で始まる
朝食と朝礼

取材で、訪れたのは午前8時
前。すでに朝4時からひと仕事終
えた人たちが、食堂に集まり朝食
をとっています。卵・チーズ・ジ
ヤム・牛乳・パン、すべての食材
が自家製で賄われ、代表の宮嶋
望さんも、みんなといっしょに食

事していました。
「朝礼しよう。」食事が終わって
くつろぐ人が増え始めたタイミン
グで、当番が鐘を打ち鳴らしまし
た。「今日は、何をするんですか。」
の問いに、ひとりひとりが仕事や
用事の内容をみんなに説明して朝
礼は終わりました。

共働学舎新得農場
代表
宮嶋望さん



120頭の乳牛、ブラウン・スイス牛がなだらかな斜面に放牧されている



絞った牛乳でつくる新得農場のチーズ



朝のひと仕事を終えて、みんなで一緒にとる朝食

でき上がったカード
は、すくいあげてモール
ドと呼ばれる型に流し
込まれ、チーズの原型に
なっています。
「ポンプを使わずに牛
乳を移動させる工夫が、
チーズを美味しくして
いるんです。石造りの熟
成庫も安定した品質の
チーズを生産するため
に外気温の影響を受け
ないようにすることが
目的です。」代表の望さ
んと36年間農場経営を
ともにした妻の京子さ
んの案内で、工房の奥に
ある熟成庫に入りました。

完全手作りのチーズ工房

チーズ工房は、農場の入口近く
に位置し、牛舎が隣り合っていま
す。午前4時半に搾乳された牛乳
は、パイプを通して自然にチーズ
工房に流れ下って行くしくみにな
っていて、低温殺菌後に、バット
の中でカード（凝乳）がつくれ
ます。

DATA

農地 67ha
乳牛120頭、肉牛5頭、母豚40頭・
種豚1頭、鶏206羽、羊20頭
有機野菜 3ha
年間売上 2億1400万円
自労自活人数
大人59人 子供11人
給料と暮らし
生活費等支払規程を元に月額1万円
～6万円を受け取っている。食事や
居住にかかる費用は一律1万円。自
家用の野菜や卵・牛乳も取り入れ、
子供の教育費など法人の貸付制度も
設けるなどの工夫もして、農場内で
“自労自活”。共働で個々の暮らし
を支えている。



チーズ工房の奥にある、石造りの熟成庫。塩を含んだ布で、チーズを毎日
磨き上げる

熟成庫に眠るラクレットチーズ

熟成庫の扉の向こうには、ラク
レットチーズがずらりと棚に並ん
でいます。

まだ、日の浅いものは白く、熟
成期間の長くなったものはオレン
ジ色になっています。

熟成期間中も、3日に1回塩水
を含んだ布で磨き、裏返して均等
に空気にふれるようにしていきま
す。

静かな庫内でひとり黙々と磨き
上げる作業をしている人がいます
が、「二人でいるほうが集中でき
る自分にはいい仕事」と自ら志願
して作業しているそうです。3カ
月の熟成期間を経て出庫したラク
レットチーズは、180グラム前
後に小分け真空パックして出荷さ
れています。

なだらかな斜面と ブラウン・スイス牛

農場の放牧地に向かって小道を
上って行く途中に、共働学舎で働
く人が住む家や寮があり、「自労自
活」の様子が垣間見えてきました。
この日は、パークゴルフ大会が開
かれていて、仕事の合間で楽しん
でいる人もいるそうです。なだら
かに傾斜した放牧地には、若いブ
ラウン・スイス牛が放牧されてい
ます。入植時には不利に思えた20
度以上の傾斜地で放牧された牛の
乳から生産されるチーズは、山の
チーズと呼んで、ヨーロッパでは
別格の扱いを受けるとのこと。共
働学舎新得農場で生産されたチー
ズも受賞歴が物語るように、高付
加価値のある本物として、全国の
美食家に販売されています。

受賞者を訪ねて

自然農法に

活路を見出す

農業の可能性を追求し、自然栽培法にたどり着いた
佐伯さんを訪ねました。

(株) パーソナル
アシスタント青空
代表取締役
佐伯康人さん

自分たちのブランド「青空米」

パーソナルアシスタント青空は、佐伯さんご自身の子育てを通して痛感した様々な支援を「パーソナルアシスタント」という考え方で実践し、障がい児デイサービス・居宅介護・移動支援を主な事業としています。そして働く場も

支援に加えるべく、農業は障がい者にとり様々な活躍の場があると思込んで野菜作りに取り掛かったのが、始まりです。試行錯誤を繰り返し、水田での米作りに挑戦。今では、就労継続支援B型事業所メイド・イン・青空で収穫された「青空米」が注目を集めています。

ます。

強く健康な水稻を育てるために

「青空米」の水田は、住宅街のそばに点在する休耕田を借りて栽培されています。無農薬・無肥料・無除草剤による「自然栽培」を特徴としていて、病気や害虫に負けない健康な稲を育てるためにきめの細かな管理がされています。

「私たちの水田は、苗の間隔を広く取って田植えをしています。苗の数が少なくなるから収穫量が少なくなると思いますよね。だけど、これを見てください。」差上げられた稲の株は、佐伯さんの水田のものが明らかに大きくなっています。

「稲の株が大きくなることを分けていいます。水の管理をきめ細かく行うことで枝分かれが促進され、間隔を大きくとることで日当たり・風通しがよくなり、強い健

DATA	メイド・イン・青空（就労継続支援B型部門）の状況
	耕地面積 11ha（33,000坪）
	内訳 田 2ha 畑 4ha 果樹 5ha
	収穫 自然農法米 150俵以上を生産 平均卸価格の約3倍（1俵 32,000円）
	野菜 年間100種を栽培 果樹 みかん・梅 加工品類（梅干しなど）
	農産物売上 通販 750万円・卸売 230万円 計980万円

康的な稲に育つんですよ。」

市価の3倍から4倍の価格で完売する青空米

「トラクタは、軽量なものがいいますよ。重いと沈んでしまいます。」「除草は、チェーン除草という方法が一番簡単です。」「水田でも大切なのは空気です。しっかりと、かき混ぜると田んぼが喜びます。」

佐伯さんは、見学者にも惜しげもなく丁寧にノウハウを伝えていきます。

「今、あちこちに耕作放棄地が増えています。自然栽培は、消費者が求めるニーズの中でもっとも高いと実感しています。同じ地域のお米の3倍から4倍の値段で完売しますから、耕作放棄地と自然栽培の組み合わせは、各地の作

業所でも取り組みやすいと思います。」

自然栽培のネットワークを夢見て

「今日は、人を入れ過ぎだな。」最後の稲刈りをみんなで行う様子をみて、佐伯さんは目を細めながら、「農業と福祉の連携をやりたいんです。疲弊した農業を福祉の分野で活性化したい。」

佐伯さんの目下の課題は、自然栽培に取り組む施設を増やすこと。そして、ブランドとして確立していくことで、消費者に安定して供給するネットワークを作るのが目標です。「売り手と買い手がまだまだ上手くつながっていないんです。」まもなくオープンする直売所も生産する自分たちの「見える化」に重要な意味を持つと佐伯さんは考えています。



休耕田を借りて栽培する「青空米」



昨年最後の稲刈り



見学者に惜しげもなくノウハウを伝える佐伯さん (写真中央)



自然栽培により強く大きく育った稲 (左)

受賞の
ことば

つぎの世の中に必要なものを、 彼らは伝えるメッセンジャー

■人の持つ可能性を信じる農場

東京の自由学園で英語教師をしておりました僕の父親・真一郎は学校を辞め、40年前に長野で共働学舎を始めます。

障がいや病気で教育を受ける場がなかった人、何かの理由で自分が生きていく場を見つけれなかった人たちが、どうしたら自分の中に潜んでいる力で生きていけるようになるのか……。そういったことを考えて、共働学舎の構想を書き上げました。

僕は父とソリが会わず、昔からずっと喧嘩をしていました。でもいつぶりで父の言うこと、やることは正しいとも思っていました。

父の構想に「心閉ざした子どもたちも、動物と接することで心開くかもし



宮嶋 望さん
農事組合法人 共働学舎新得農場 代表

1951年、群馬県生まれ。74年、自由学園最高学部卒業。78年、ウィスコンシン大学（マディソン）Dairy Science B.S取得卒業。共働学舎新得農場を開場。84年、チーズ製造の研究開始。90年、ナチュラルチーズ・サミットin十勝を企画開催。98年、第1回オールジャパン・ナチュラルチーズコンテストで「ラクレット」が最優秀賞。2004年、第3回山のチーズ・オリンピック（スイス）で「さくら」が金メダル。以降、国内外のコンテストならびにMonde Selectionの上位常連に。08年、G8洞爺湖サミットで「さくら」が日本代表に選抜。10年、仏「ギルド・デ・フロマジェ」の称号を受ける。

■彼らが示してくれたもの

帰ってくると、理念に賛同した新得逆、手仕事を増やして、じつくり時間をかける酪農を目指すことにしました。

帰ってくると、理念に賛同した新得

町が、30町の土地をただで貸してもいいという話が舞い込みました。すばらしい土地でした、写真で見たかぎりでは（笑）。あとで傾斜が急だとわかって、びっくりしました。でも後々それがすごいチャンスとなりました。

ヨーロッパで開催されている「山のチーズ・オリンピック」。傾斜が20度以上の土地で製造されたチーズが競い合うコンテストです。その出場条件にピタリとあっていたんですね。幸い、そこで金メダルをいただきました。

すると、みんなの雰囲気が変わって変わりました。チーズの味は8割方が原乳で決まります。以前は「最後のチーズをつくる人が偉い」というムードがありました。餌やり、牛小屋の掃除、搾乳などすべての仕事が必要だとわかり優劣が消えました。重要な役割を担っていると誰もが実感しています。自然と笑顔が増えました。

食べものはじつくり時間をかけて丁寧にしたほうがいいものになります。潔癖症だとか完璧主義はむしろプラスです。

不利なところもひっくり返すことができれば、非常にすばらしい結果が出せる。いまは確信を持ってそう言えます。彼らが示してくれたのは、つぎの世の中の可能性だと思っています。

宮嶋 望さんへ贈られたお祝いの俳句

雪の野を宝庫に変へし底力

花田春兆

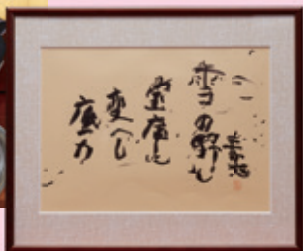
映像で見ても、頼もしくて楽しくなる巨牛の群れ。いかにも北海道らしい光景だが、雪の原野を、ここまでイメージチェンジしてしまった明治初年以降の先人開拓者たちと、代々にわたって引き継いで、発展させた力強さをみなぎらせている光景。

たった1回だけれど訪れた記憶はある、千歳空港への道すがら見かけてはいるはずだが、こんな近くで接した事は無い圧倒的な迫力。

しかもそれを支えているのが、障害・ホームレス・知的障害：等、陰の世界の人として疎外されていた人々だというのが驚く。

その人々に、大志を抱かせて、蘇らせた人の偉大さには驚嘆の他ない。そんな意味を籠めた底力のつもりだが、広大な山野が潜ませている莫大な知力をも感じただけだ。

と思う。



受賞の
ことば

農福連携がもつと 日本中に広がってほしい

新しい仕事を生み出すんだ！

地域に暮らす障がいを持った子どもたちが学び、働く場を見ていく中で、いくつか納得できないことがありました。もともと「常識ある大人」という僕ではなかったので、そのせいもあつたのかもしれませんが「もっとちがう方向があるんじゃないか」と、ずっと考えていました。そこでふと農業に目が行きました。一つの仕事に障がいのある人たちを入れるのではなく、一人ひとりに合った仕事を提供する。「百姓」というぐらいだから、畑仕事を細分化していけば、千にも一万にもなるんじゃないか？ 適した仕事に彼らがそれぞれ特化していけば、一芸に秀でた職人になるのではないかと？

また、こんなことも思いました。作
業所で毎日同じ一つ0.1円の仕事をしてお給料3000円という人たちがたくさんいました。その商品の価値を1円にできればお給料は3万円に、10円にできれば30万円になる――。

僕は「新しい仕事を生み出すしかないんだ」と想像しつつ、生まれて初めて農業というものをやりました。蝶々がきれいだなと思いつながらキャベツを植え、気づいたらキャベツが全部、虫に食われてなくなつてた……。そんなレベルからです。（笑）

地域を再生させる福祉へ

最初は肥料や農薬、除草剤だらけで始めましたが、「奇跡のリンゴ」で知られる木村秋則さんと出会いました。自然栽培に取り組むなら「まずは田んぼが簡単だよ」その言葉に従いまし

た。

自然栽培の田んぼと隣の田んぼ、よく見てみると生態系がまったくちがうことに気づきます。自分たちの田んぼにはさまざまな生き物が稲といっしょに暮らしながら稲を支え、稲がまた生き物たちを支えている気がしました。そのとき、なんとなく自分の子どもたちを支援してくれる地元の人たちと地域の姿が重なりました。「ああ、自然栽培の世界を突き進んでいこう」そう思いました。

それからは一気に6町の耕作放棄地を自然栽培で再生していくようになりました。それまで「仕事ができるわけがない」と言われていた彼らが、逆に荒れた土地や水路を、地域の問題を解決している様はじつに痛快でした。

僕らはまだまだですが、それでもこの小さなモデルケースを全国に広げていったらいいと思っています。福祉の力で福祉の仲間たちと農業の再生をすることは、大袈裟かもしれませんが、ひとつのルネッサンス。日本を元気にすることに繋がると思うからです。そのためにも飲食や6次化にも取り組んで、しっかりとしたモデルに自分たちがならなければいけない。それがいまの目標です。



佐伯康人さん

株式会社 パーソナルアシスタント青空
代表取締役

1967年、福岡県生まれ。90年、ロックバンドWIZKIDSのボーカルとしてインディーズデビュー。92年、東芝EMIからCDデビュー。97年に家業を継ぐため帰郷。2000年に三つ子を授かるが脳性まひに。以後、地域ボランティア「三つ子ちゃんを支える会」に助けられつつ、障がい児を持つ親の苦悩や行政サービスの不備を感じ、自ら居宅介護、訪問介護事業を開始。05年、(有)パーソナルアシスタント青空設立。児童デイサービスや介護タクシーなど順次展開。06年、営利部門「メイド・イン・青空」発足。09年、B型事業開始。10年、無農薬自然農法を実践。14年、多機能型事業を開所。

佐伯康人さんへ贈られたお祝いの俳句

実る秋 野から人から湧く力

花田春兆

シヨックだったのは、これだけの大事業を成し遂げさせた、そもその原動力になったのが、授かったCPのお子さん方だった、ということ。同じ重いCPで長い生涯を生きて来た私には、ずしんと来る重さ以外のなにものでもなかった。自然に自分の両親が想われて、親しみが湧いた。飛んでもお会いしたい気分。数年前だったら、さっそくハンディキャブを予約していたらう。

写真で見る広大な田や畑が無農薬無肥料であるのには驚かされる。

まさに若い力でのゼロからの「切り拓き」。それを不屈の努力で乗り越えて見事な実りの秋を迎えるまでに導かれたのだ。だからこそその授賞。終戦直後ゼロからの経験をしている我々世代には、痛いほどビーンとくるのだが、大勢を占めつつある戦争を知らない世代に、どこまで染み込ませ得ているのか。改めてそれを問い直させるという意味からも、賞が持つ意義は大きいはずだ。



※CP：脳性麻痺（のうせいまひ、英：Cerebral palsy, CP）

私たちの賛助会費が活かされています ■ 障がい者給料増額支援助成金

助成先レポート

Vol.

22

立ち止まることはできない。

水産加工部門、再生までの道程

NPO法人きらら女川
宮城県牡鹿郡女川町
就労継続B型

2011年3月、東北を中心に襲った東日本大震災。被災した中には多くの作業所もありました。NPO法人きらら女川もその一つ。過酷とも呼べる試練にも、しかしその歩みは止みませんでした。むしろ力づよい輝きを増す彼らを訪ねました。

「女川の自慢」を取り戻す

牡鹿半島の付け根。優れた漁場を抱え、カキなどの養殖業も盛んだった女川町は、東日本大震災で壊滅的な打撃を受けました。町の整備計画もまとまり復興は着実に進んでいますが、公営住宅の完成はまだまだ先、その道は半ばです。しかし、この地でいち早く復活のろしを上げた作業所があります。

「仕事をつくり給料を向上させる。それも地域のものを使い、被災地から発信していくなら、やっぱり女川は水産の町。そこは挑戦しないとダメなんです」と語るのは、きらら女川の所長・松原千晶さんです。

理事長である阿部雄悦さんは長年、食品加工会社を経営しており、水産加工についてもすぐれた特許技術を持っていました。しかし、冷凍設備がなければ、海産物の仕入れもままなりません。やむなく被災後はかりんとうやパンの製造事業から立て直しを図ってきましたが、昨秋ついに当財団の助成を活用し、念願の冷凍冷蔵設備を手に入

入れることができました。これで女川のおいしいサンマを、ホタテを加工して全国に届けることができるようになる——。震災から3年半、ついに水産加工部門が立ち上がりました。

とにかく動く！ それしかない

阿部雄悦理事長はかねてから、障がい者雇用に積極的で、おからを使ったかりんとう製造のノウハウを福祉事業者に提供するなどパイオニア的な活動が続けていました。

しかし、当の女川に作業所が存在しなかったことから一念発起。かりんとう製造を指導した縁から、鳥取で作業所づくりをしていた松原さんと組んで、きらら女川を立ち上げました。2010年12月のことです。すぐに利用者が増え、地域理解の深まりも感じ、町の中心部に引越を決めました。飲食スペースも備えた新たな店舗です。

「引越はおおかた2時までかかりました。で、震災が来たのが2時45分ごろ……」その日、新店舗も阿



整備した冷凍庫・冷蔵庫の前でサンマの水切り作業を行うきらら女川のみなさん



おからかりんとうの製造。こにも特許技術が生かされている

製品のクオリティに驚き！ 助成の意義を再確認



●ヤマト運輸労働組合 宮城支部副委員長
五十嵐智章さん

今回は西野沙織さん(写真右)と五十嵐智章さん(写真左)の両副委員長が訪問。誌面初登場となる五十嵐副委員長に感想を伺いました。

実際にお伺いしてみて、製品の完成度、仕事の創意工夫に驚きました。自分も以前、魚の取り扱いの多い、塩釜の営業所にいたので懐かしかったです。

こういう人たちのためになっているところを目の当たりにすると、私たちのカンパ、助成金は生きた使い方をされていると思いました。写真もたくさん撮りましたので、支部広報にばっちり記事を載せるつもりです。

頑張っている人たちにこれからも支援が届くよう、個人単位から支部単位、支部単位から全国単位へと、自分たちができることを頑張っていかなければいけない。そう感じましたので、まずは支部としての支援活動をしっかり盛り立てていきたいと思います。



市場から仕入れたサンマの水切り作業を副委員長もお手伝いさせていただきました



現在の女川港



助成金で整備した大型の冷凍庫・冷蔵庫



電子レンジでほくほくのホタテができがり



理事長の阿部雄悦さん(左)と所長の松原千晶さん

部理事長の加工場もすべてが流されていきました。利用者さんにもまだ行方が分からない方が2名います。
麻痺したような日々がひと月ほ

どつづきました。
「現実を飲み込むのに必要な時間でした。そして事業を止めておける限界でもありました」
きらら女川は、全国の作業所に、

かりんとうの原材料や製品を出荷していました。事は自分たちだけではすまない。それで売上を上げて、給料をひねり出しているよその事業所にも迷惑がかかる。

当面の目標は月給5万円

選んだ決断は、活動拠点をいったん鳥取に移し、再生を狙うというもの。すぐに鳥取であらたに作業所を立ち上げ利用者を募り、6月には鳥取からの出荷を果たしました。

そうした苦闘を経て、女川にようやく戻ってきたのは2013年の7月。以来、鳥取の作業所に助けられながら、ともに給料のアップに務めてきました。

女川の海産物の加工を鳥取で引き受けたり、パン製造のエキスパートとなった鳥取の利用者さんが、女川まで出張指導に訪れたり…。現在はそろって月給3万円を達成しています。

理事長にはもう一つ、秘策があります。例の特許技術です。『魚介

類などの生鮮食品を、風味を損なうことなく冷凍保存』することができま。この技術は今後はさらに広く活用し、電子レンジで温めるだけで、香ばしい焼きたてのサンマが食べられる冷凍食品など、どんどん新商品をリリースしていく計画です。

「春にはJRR石巻線・浦宿ー女川間が復旧し、駅前にはプロムナードができます。私たちもそこに入居が決まりました」と笑みを浮かべる松原さん。月給5万円達成への布石は十分です。

障がい者の自立のみならず、女川の復興をすこしでも牽引したいという責任感にも似た意気込みが、きらら女川のタフな活動を支えています。

チンするだけで焼いたサンマのできあがり。煙もレンジの掃除もなし





地域の方や市の障がい者支援課の方などが大勢お祝いに駆けつけました



パティシエとして活躍する西嶋健一さん(右)と杉山悦子施設長



「行け行け木立！」と改装した店舗の前でやる気満々の職員と利用者さん

塾長コメント

亀井塾長が行く

笑顔で働ける環境に変えよう

扉を開けると、ジャージ姿の利用者さんが手持ち無沙汰にしている。これではお客さんは入りづらい。それで揃いのエプロンをつくり、働く格好から変えていこうと話しました。また、クッキーの製造販売をはじめることで、今まで仕事のなかった利用者さんも袋詰めなどの作業ができるようになる。利用者さんは働く喜びを知ることによって笑顔になり、その笑顔がお客さん呼び込むんです。



「笑顔を決めよう」とお祝いの言葉を贈る亀井塾長

塾生メモ (NPO)サポートセンター木立 「軽食・喫茶の木立」

●亀井塾：1期生●対象事業内容：クッキー製造部門の新設●平成25年度売上：12,593,330円●平成25年総支給額(月額平均給料)3,587,426円(14,948円)●利用者人数：20人●助成内容：クッキー製造販売を行うための店舗改装資金●助成金の種類と金額：平成25年度「夢へのかけ橋」事業改革モデル化資金300万円●事業形態：地域活動支援センターⅡ型●利用者種別：精神・知的・身体

クッキーもつくれる店舗へ 軽食・喫茶の木立

働きやすい明るい店舗に改装
利用者さんも張り切っています

平成18年、兵庫県加古川市にある寺家町(じけまち)商店街の空き店舗でスタートした「軽食・喫茶の木立」。利用者さんの仕事は、厨房でのお弁当の盛りつけや食器洗い、ホールでの接客、掃除などです。しかし狭い厨房、動きにくい間取りのため、注文が集中するとうまく対応できないことも。「売上は伸びず、バタバタと忙しいだけ。利用者さんの出勤率も悪くなり、なんとかしなければと実践塾に入ったのです」と塾生の杉山悦子施設長。塾で学んだことを活かして、事業改革プランを練りますが、なかなかいいアイデアが浮かびません。そんなある日、亀井塾長が視察に訪れます。「塾長が来所された平成25年の3月5日は、私たちにとって歴史的な日になりました」。亀井塾長は、売上を伸ばすための働きやすい店舗にする改装案と、クッキーの製造販売をはじめることをアドバイス。「塾長の一言で、施設の代表も一歩踏み出す決意をしてくれました」。

昨年8月末に行った改装工事で、休憩室を潰して壁を取り払い、広く動きやすい厨房へと変え、クッキーを製造するスペースも確保。物置だった2階に、休憩室とクッキーの袋詰めなどができる作業室をつくりました。また、ホールと厨房の仕切りをガラス張りにし、利用者さんの働く姿が見えるオープンで明るい店舗に一新しました。「工事の後、掃除やビラ配りなどの開店準備に大忙しでしたが、自分たちの新しいお店ができると利用者さんも意欲的に動いてくれました。9月からは、新たにモーニングとイブニングサービスを開始し、多い時は70人近いお客様が来店。利用者さんの出勤率もぐんと上がっています」。10月の売上は約104万円。給料も25年度平均月額1万4948円から50%アップの2万2000円になりました。クッキーづくりは、パティシエの資格を持つ利用者さんが担当し、シェークリームなどの新商品にも挑戦中。杉山さんは「食事・お弁当・クッキーの三つを一緒に成功させ、塾長とお約束した給料増額と就労継続支援B型事業所への移行を達成します」と元氣一杯です。

10月3日、地域活動支援センター「軽食・喫茶の木立」でクッキー事業開所式が行われ、多くの地元の方と一緒に新たな門出をお祝いしました。事業改革モデル化資金を活かして改装した店舗では、軽食・喫茶、お弁当の販売・配達に加え、クッキーの製造・販売も開始し、給料増額を目指します。

『経済的自立力達成事業所紹介サイト 夢へのかけ橋』を開設しました

障がいのある方々の働く場を、経済的に自立した夢のある職場へと変える行動を起こす、それがヤマト福祉財団が進める『夢へのかけ橋プロジェクト』です。このプロジェクトの一環として『経済的自立力達成事業所紹介サイト 夢へのかけ橋』を開設しました。

このサイトでは、売上金額・給料支給総額・従事する人数で業態ごとの分布をプロットし、取り組みやすさや規模で参考にできるよ

うにしています。さらに、月額平均給料3万円以上を支給している各事業所が「どんな業態で、どう工夫し、どの地域で、何人の利用者さんに、いくら給料を支払っているか」などもご紹介しています。

より多くの事業所が、障がいのある方々の夢をかなえるかけ橋となる一歩を踏み出せるように…。先行事例を模範として取り入れ、今後の給料増額、事業改善にお役立てください。

A bridge to your dreams 夢へのかけ橋となる

このサイトでは、一人あたり月額平均給料3万円以上を支給して、障がい基礎年金と合わせて相対的貧困線を越えた福祉事業所をご紹介します。

ヤマト福祉財団では、夢を実現させるために、経済的自立力を備えた新しい福祉が広がるよう活動しています。

いろいろな視点から分析・検索、今後の事業改革の参考に活用ください

業態ごとの傾向を知る

どの業態の売上が高く
給料も多く支払っている？

縦軸に給料支給総額・売上額を、横軸には従事する人数を示したグラフに、業態ごとの平均値を示すアイコンを配置。業態ごとの傾向が、一目でわかるようにプロットしました。これにより、どの業態が自分の施設の参考になるか、取り組みやすいかなどを調べることができます。



○他にもさまざまな角度からチェック

「業態ごとで各事業所の人数規模と給料の関係をプロットしたデータ」「地域による業態分布傾向」なども用意しています。



先行事例を具体的に見る

成果を上げている施設は
どんな業態でどんな工夫？
詳しく知りたい！

ここでご紹介している事業所も、それぞれが抱える厳しい条件を乗り越え、給料増額を達成する工夫を凝らしています。その具体的な方法を読み「同じ業態でもこんなやり方をしているのか」「うちにはこんな業態が合っているのかも」など、自分の施設に合った給料増額の改善案の参考にしてください。

事業所名	業態	売上金額(円)	給料支給総額(円)	従事人数
事業所A	飲食業	1,200,000	1,500,000	10
事業所B	小売業	800,000	1,200,000	8
事業所C	サービス業	900,000	1,300,000	9
事業所D	製造業	1,100,000	1,400,000	11
事業所E	福祉サービス	700,000	1,100,000	7

市場が求める、本物の商品をつくる

「本物の商品をつくる」は、事業所の大きな目標です。市場が求める商品をつくるためには、品質管理とコスト管理が重要です。本物の商品をつくることで、利用者さんの満足度を高め、給料増額を実現しています。

本物の商品をつくることで、利用者さんの満足度を高め、給料増額を実現しています。

この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコメール便配達事業

ミスの原因を考えることで、 失敗も貴重な経験となる。

JR名古屋駅から近鉄線に乗り換えて約30分。
四日市駅から車で約10分の住宅街が「サポートセンターあいづろ」の配達エリアです。
2人のメイトさんを中心に、たくさん利用者がメイトさんとして関わりながら、
広い地域を確実に配達しています。



メール便を確認しながら、地図に蛍光ペンでマーク。その後、配達順に並べてバッグに入れていきます。

「サポートセンターあいづろ」がある三重県四日市市生桑町は、細く曲がりくねった道と坂道の多い高低差のある住宅街です。ここに隣接するエリアを含む3つの地域を、3班で担当しています。

イトさん、西村健志さんと佐野裕紀さんは、歩いて1〜2分の場所にあるヤマト運輸四日市生桑センターへメール便を引き取りに行きます。手続き後、台車を借りて「サポートセンターあいづろ」へ運搬。そして、西村さんが台車を返却している間に、

佐野さんは仕分けに入ります。テーブルの上にはエリア別の大きな段ボールが並べられ、側面には町名や番地が見やすく書かれています。段ボールの中に作られているのは、番地ごとの縦の仕切り。その中にメール便を立てるように入れて行きます。

1年半前に移転し、 配達エリアが一新。

「サポートセンターあいづろ」がメール便配達事業を始めたのは約6年前。以前にメール便配達をしていた職員からの紹介が、きっかけでした。4年半配達してすっかり慣れた頃、事業所が現在の場所へ移転。配達エリアが一気に新しく広くなりました。すべてが一からのスタートとなったため、全エリアを職員がチェック。車通りが多い道、細い道で対向車に気をつけなければいけない道、などのリストを作成したといいます。そして、初めは職員と一緒に配達。注意が散漫になりがちなメイトさんになんどもアドバイスしながら、安全な歩き方を学んでもらったそうです。

しだいに慣れた西村さんと佐野さん



メール便をエリア別の段ボールに仕分けする西村さん(左)と佐野さん(右)。

んは約1年前に一人で配達するようになりました。メール便は毎日平均で、約100冊。西村さんは週に5日、いちばん広いエリアを受け持ち、遠い地域は自転車と徒歩で配達しています。あらかじめ自転車を停める場所の許可をとり、そこを拠点にして徒歩で回り、また自転車移動するやり方。近い地域は、バッグを抱えて徒歩で配達します。佐野さんは

●三重主管支店 四日市生桑センター

面積17.53km²/人口38,759人/世帯数14,308世帯

●社会福祉法人 あいプロジェクト 多機能型作業所 サポートセンターあいづろ

2008年からメール便配達を開始。1日の平均配達数、約100冊。
その他の活動は、製薬作業・販売、しめ縄作り、農作業など。

「障がい者のクロネコメール便配達事業」

参入施設数 320施設 従事者数 1,644人(2014年10月現在)

お問い合わせは……(公財)ヤマト福祉財団 メール便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

<http://www.yamato-fukushi.jp/>



右／メイトさん4人を職員2人がサポート。ゆっくりと歩きながら配達します。下／住所を確認してから丁寧に投函する渡辺大祐さん。 左上／どんぐり保育園で手渡しする西村さん。 左下／メール便配達を最初から担当して6年目の佐野裕紀さん。楽しみは大好きなディズニーランドに行くこと。



右／支援員の古市遼さん 「グループで配達している地域では、メイトさんの顔を覚えてもらえるようになりました。あれ、今日あの子は？と声をかけてもらったりします。町の人と挨拶したり、接点ができるのは、とてもいいことです。運動にもなりますね。とにかく、仕事を通して、一人一人に自信をつけさせてあげたいと思っています」



腰が悪いので、キャリアバッグを使って、近くのエリアを徒歩でゆっくりと回ります。

取材の日は、西村さんが55冊、佐野さんが35冊。残りの13冊は、メイトさん4人を職員2人がサポートしながら、一軒一軒ゆっくりと配達していました。地図を持つ人、メール便を入れたバッグを持つ人、端末操作をする人とそれぞれが役割分担。この班は9人の利用者さんの

中から毎日3〜4人、交代で配達を担当しています。

日報に書き込み しっかりチェック。

「サポートセンターあいづろのルールは、必ず日報を書くこと。日報は、その日の配達数の他に、作業準備をした人の名前や、地図をチェックしたかどうか、ルートを決めたか



などの項目に○をつけていくものです。その他「持ち物チェック」の欄で、作業着、携帯電話、地図、調査票、ボールペンなどをきちんと持ったかどうかを確認します。配達が終わったら、「終わり作業チェック」の欄をマーク。欄外には、持ち戻り、転居、新しい家の情報があれば書き込むスペースもあります。

「元々は職員のために作った日報ですが、今ではメイトさんがしっかりと自分で書き入れています」と支援員の古市遼さん。日報に書き込みながら確認していることが、配達ミスの少ない理由ではないかと話します。

納得すれば、 ミスは役立つ体験となる。

「それぞれが持っているこだわりがあります。だから、失敗しても、その解決法をこうしなさいと押し付けません。原因は何か、自分で考えることでミスを乗りこえてもらいます」と支援員の古市さん。「たとえば、雨の日にメール便を濡らしてしまったときは、なぜそうなったかを理解することが大切です。袋のフタをしっかり締めていなかった、バッグの上に傘をかざしていなかったなど、原因を確認して、どうしたら濡れないかを考えると失敗を繰り返しません」

また、小さなポストに無理矢理メール便を押し込んで、商品を傷つけてしまった時は、職員と一緒に対策を練ったそうです。そして、あらかじめ小さなポストの家を地図に星印

でマークすることにしたのです。星印のある家に配達があるときは、「お留守だったので持ち帰ります」と書き込んだ調査票を持参。留守なら調査票をポストに入れて、メール便を持ち帰ります。この流れをしっかりと身につけるように、繰り返しアドバイスしたそうです。「今では、調査票も自分で書きまします、今日は星印の付いた家が何軒ありましたと忘れずに報告してくれます」と支援員の古市さんはうれしそうに話します。

仕事意識を持つことが 成長につながる。

「施設の中ではできないことも、外ではできるようになったことがあります。たとえば、少しずつ明瞭に言葉が言えるようになったり、小さな声が大きくなったり。仕事という意識を持つてきているためだと思います。西村さんはとくに一人で配達できるようになって、自信がついたと思いますね」支援員の古市さんは、ここから就労に結びつくことを願っていると語ります。

夢を叶えるチカラになりたい。

ヤマト運輸三重主管支店 メール便課 斎藤幸正課長は「この広いエリアをほぼ歩いて配達するのは、大変だと思っています。仕事ぶりは、本当に一生懸命で前向き。確認するという意識が高いし、思い込みがないから、ミスが少ないのでしょう。かけ



前列向かって左から／サポートセンターあいづろ、職員 山内沙弥香さん、大石加奈さん、中西伊吹さん、西村健志さん、佐野裕紀さん、職員 増山雅代さん、木下瑞希さん、中山雄介さん、職員 武井佐和さん、後列向かって左から／ヤマト福祉財団中部支部 後藤淳治事務長、職員 伊東元悦さん、岡本聖さん、職員 井村のぞみさん、里見晃裕さん、小林宗一郎さん、支援員 古市遼さん、渡辺大祐さん、サポートセンターあいづろ。今村博之施設長、瓜生英貴さん、東田洋平さん、ヤマト運輸三重主管支店メール便課 斎藤幸正課長、ヤマト運輸三重主管支店四日市市村支店 小牧一敏支店長

がえのない存在です」と話します。

ヤマト運輸三重主管支店四日市市村支店 小牧一敏支店長は「メール便を通して、働く喜びを知ってもらっているのはうれしい。他の施設にも声をかけてみたいと思いました。もっと広いエリアを配達したいという積極的な声も検討します。夢を叶えられるようチカラになりたい」と結びました。

メール便の配達のために、メイトさんはキーづくりなどにも携わっています。一人でできる仕事で自立心を育み、大勢といっしょに進める仕事でコミュニケーションを学ぶ。サポートセンターあいづろでは、一人一人の個性を伸ばすように「愛」が注がれています。

使う人の姿を思い浮かべて ピカピカにメンテナンス



「使う人が喜んでくれるように
もっときれいに」そんな指導を
受けて、一層真剣に取り組むよ
うになった宮嶋さん。「半年で
スピードも随分と向上しました」
と評価も上がっています。

宮嶋琢人さん(左から2番目)と
森田永子課長(右)、
さいたまレンタルセンターのみなさん

■ヤマト自立センター スワン工舎新座 スワン工舎新座 就労に必要なスキルの習得
はもちろん就労先の開拓からジョブコーチによる就労後のサポートまで一貫したプログラ
ムで、障がい者の自立支援に取り組んでいます。

■株式会社インフォゲート 篠崎運輸株式会社のグループ会社として「健康・介護・環境」の
三つをテーマに運送だけではない付加価値を提供する(株)インフォゲート。レンタル管理事業
部では、各家庭へ介護用品のレンタル、メンテナンスを行っています。



介護用ベッドを消毒・洗浄



傷や汚れを修復、新品同様にします



ダンボールもきれいに組立られるようになりました

宮嶋琢人さん (株) インフォゲート レンタル管理事業部(平成26年6月10日入社) 宮嶋さ
んの勤務時間は9:00~17:00(土日・祝休み)。「毎日仕事楽しい」と話す宮嶋さんは、勤務先
のさいたまレンタルセンターまで、自転車で約20分ほどかけて元気に通っています。

同僚の温かいアドバイスを受け、戦力として着実に成長

「スタッフは、わが子のように宮嶋さんに接しています。彼がなにか困っていると、こうしたら、あしたらとどれかがすぐ声をかけます」そう話すのは(株)インフォゲートの営業本部の森田永子課長。「宮嶋さんを特別扱いしている訳ではなく、元々そんなアットホームな職場なんです(笑)。ですので、障がいのある方の正式な採用は初めてでしたが、なにも不安はありませんでした」。

さいたまレンタルセンターでは、介護用品のレンタル事業を中心にを行っています。配送・組立から、回収後の消毒・洗浄・修理まで、新品同様にメンテナンスをします。宮嶋さんの担当は、このメンテナンスの仕事で、介護用ベッドのサイドレールなどをきれいに磨き上げ、傷ついた所を丁寧に修復しています。「当初は、ここをやり直してと注意されると戸惑うこともありましたが『使う人のことを考えるときれいな方がいいよね』と話すと、納得して取り組むようになりました。この半年で他の従業員と変わらないスピードでこなすことができるようになってきました」。

宮嶋さんは、午前中にメンテナンス業務を、午後からは介護用品を詰めるダンボールの組立作業を行います。「ダンボールの組立作業も、先輩のアドバイスをしっかり聞いてどんどん上達しました。いまでは

小型のダンボールは、すべて宮嶋さん一人に任せています」。

「仕事が楽しい、この仕事をずっと続けたい」と話す宮嶋さん。お給料は月給制で、大半を貯金しているそうです。その中から母の日にはケーキを、妹の誕生日には大好きなうなぎをごちそうしプレゼントも購入しました。家族と外食する日は、朝からとても楽しそうと森田課長。家族が喜ぶ姿は、仕事のやりがいの一つになっているようです。

「仕事のレベルアップを図るため、今日いくつか仕事をこなしたのか、いくつ注意されたのかを自分で書き込むチェックシートも用意しました。これを見れば自分がどこまで仕事ができるようになったかがわかるので、モチベーションが上がってきたようです。これからは、他のスタッフがこなしている複雑な用品の作業にも、徐々に挑戦してもらおうと思います」。

温かく応援してくれる同僚に囲まれ頑張る宮嶋さん。「使う人の喜ぶ姿」を思い描きながら、できる仕事を一つずつ増やし、大切な戦力として成長を続けています。



「地味な作業ですが、使う人にとっては大切な仕事です」と営業本部の森田永子課長

クロネコメール便配達本人による特別報告会

現在、320カ所の施設で約1600名の障がいのある方がクロネコメイトさんとしてクロネコメール便配達に従事しています。そのなかから地元での「クロネコメール便配達本人による特別報告会」の開催を希望する施設を公募し、ご応募いただいた3施設のうち2施設が報告会を開催しました。

「社会福祉法人小さい共同体

就労継続支援B型事業所飛翔クラブ

東京都東村山市

10月18日には飛翔クラブが、地域の方々など約50名を集め報告会を開催しました。

クロネコメール便配達を始めて今年で3年目。最近では毎月3500冊以上ものクロネコメール便を配達しています。

4名のクロネコメイトさんからは、やりがいを感じていることや苦勞していること、これからの目標などの報告がありました。

配達先の方々から「ありがとう」、「ご苦勞様」と声をかけてもらい、とても励みになっていることや、ポスト投函の際、お客様が手にとったときに見やすいように投函するなどの工夫をしていることを会場の方々に報告しました。



「社会福祉法人一粒の麦の会

指定障害サービス事業所サクラ

長崎県佐世保市

サクラは11月3日にカトリック佐々教会で133名もの来場者を迎え、報告会を開催しました。

日々のクロネコメール便配達の様子をスクリーンで紹介しながら、クロネコメール便配達に携わる7名のクロネコメイトさんや職員の方々から発表がありました。

本人報告では、これからもお客様に喜んでいただけるように笑顔で、また間違えることなく配達していきたいということや、みんなで力をあわせ楽しくがんばっていききたいという報告がありました。

来場者はクロネコメイトさんのクロネコメール便配達への思いを知り、盛大な拍手を送っていました。



「夢へのかけ橋 実践塾」活動報告

○第2回楠元塾 塾長施設を見学

「塾長のお弁当づくりを実際に見学し、自分たちとなが違うのかを考えてほしい」。10月14～15日、塾生たちは、楠元塾長が理事長を務める(社福)キャンパスの会(宮崎県都城市)を訪ねました。

塾生たちは、キャンパスの会が運営する各事業所のお弁当づくりの現場を見学し、お弁当も試食。メニューづくり、盛りつけ、パッケージなど、楠元塾長がどのように現場で工夫されているのかをその目で確認することができました。また、働く環境としていかに利用者さんにわかりやすく「見える化」を行っているかにも注目。在庫管理や品質・衛生管理方法など、この機会により多くのことを学びたいと考える塾生たちから、楠元塾長は質問攻めとなりました。



効率的な盛りつけ方法や無駄をなくすための在庫管理など、現場での工夫点を見学

○武田塾塾生が「プロジェクトH」に参加

プロジェクトHとは、震災からの復興(復興)と工賃保障(工賃保障)の頭文字を取り、被災事業所と障がい者事業所が連携し、それぞれの目標達成に力を合わせていくプロジェクトです。

このプロジェクトに武田塾の塾生たちが参加。11月7～8日、被災地である女川町の水産加工会社とハンバーグ食品加工会社を訪ね、自分の施設や地域特性を活かした新商品の提案と、商品の仕入販売をどう展開するかなどを話し合いました。

「このプロジェクトに参加をきっかけに、利用者さんの給料を5万円、7万円と増額するために、現事業の枠を超えてもう一歩前に出てほしい」と武田塾長は呼びかけています。



塾生からは、地域特産物やゆるキャラなどを活かした新商品のアイデアも

クラウド型収支管理システム 第2回運用勉強会(東京会場)

11月11日、パワーアップフォーラムに参加し、システム運用を希望された方を対象に「第2回 収支管理システム運用勉強会」を開催しました。まずは経費項目の正しい入力方法を確認し、システムを利用することで見えてきた営業状況や経費動向などを各事業所ごとに報告。さらに、今後の商品や販売計画に活かせるように、ABC分析についても学びました。





Information of the Art

舟越保武彫刻展

—まなざしの向こうに—



「原の城」1971年
銅像
岩手県立美術館蔵
(撮影：大谷一郎)



「萩原明太郎像」1955年
銅像
岩手県立美術館蔵
(撮影：大谷一郎)



「ゴルゴダ」1989年
銅像
岩手県立美術館蔵
(撮影：大谷一郎)



「聖セシリア」1980年
砂岩 (諫早石)
岩手県立美術館蔵
(撮影：大谷一郎)



「聖フィリッパ・デ・ヘスス」1958-62年頃
木炭・紙
長崎県美術館 (撮影：濱本政春)

開催期間 ▶ 2015 (平成27) 年1月24日 (土) ~ 3月22日 (日)

休 館 日 ▶ 毎週月曜日

開催場所 ▶ 郡山市立美術館

アクセス ▶

● 自動車 (JR郡山駅より約10分)

仙台、会津若松、新潟、いわき、水戸方面からは、磐越自動車道「郡山東I.C.」より約20分

白河、宇都宮、東京方面からは、東北自動車道「郡山南I.C.」より約20分

● 電車・バス

JR東北・秋田・山形新幹線、東北本線、磐越東線、水郡線で郡山駅下車。

郡山駅前バス5番乗り場より「美術館経由東部ニュータウン」行き (所要時間約10分) 郡山市美術館バス停から美術館までは、歩いてすぐ (約1~2分)。

※バス時間は変更になることがあります。

開館時間 ▶ 午前9:30 ~ 午後5:00 (入館は午後4:30まで)

観 覧 料 ▶

	一般	高校・大学生
当日	800円	500円

○中学生以下、65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料

主 催 ▶ 郡山市立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会、福島民友新聞社、福島中央テレビ

協 賛 ▶ ライオン 清水建設 大日本印刷

損保ジャパン日本興亜

協 カ ド ギャラリーせいほう

問い合わせ先 ▶

<http://www.city.koriyama.fukushima.jp/bijyutukan/021-future.html>

TEL 024-956-2200

巡回情報 ▶ 練馬区立美術館

2015年7月12日 (日) ~ 9月6日 (日)

本展は、岩手県立美術館所蔵の舟越保武作品と国内の代表的な作品、およびご遺族が所有されている未公開のものを含む銅像作品約60点、ドローイング作品のほか、資料などによって、舟越保武の生涯にわたる彫刻の仕事の軌跡を回顧し、新たな視点によってその芸術の本質を捉えなおそうとするものです。人の魂に問いかける数々の作品をどうぞお楽しみください。

本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

半身不随での制作

1987 (昭和62) 年に脳梗塞で倒れ右半身不随となりましたが、その後10余年にわたり左手で制作を続け、1989年の銅像「ゴルゴダ」のようにそれまでとは異なる迫力を持つ作品を生み出しました。

本展は、岩手県立美術館所蔵の舟越保武作品と国内の代表的な作品、およびご遺族が所有されている未公開のものを含む銅像作品約60点、ドローイング作品のほか、資料などによって、舟越保武の生涯にわたる彫刻の仕事の軌跡を回顧し、新たな視点によってその芸術の本質を捉えなおそうとするものです。人の魂に問いかける数々の作品をどうぞお楽しみください。

戦後日本の彫刻を代表する重要な作品といえるでしょう。

カトリックの洗礼

舟越保武 (ふなこし・やすたけ、1912~2002) は岩手県生まれで戦後日本を代表する彫刻家です。舟越は、盛岡中学時代に高村光太郎の訳した「ロダンの言葉」に深い感銘を受け、ロダンに憧れて彫刻家を志します。父親は熱心なカトリック信者でしたが彼自身は戦後まもなく、長男の急死を契機にカトリックの洗礼を受けました。彼の作品は、大理石や砂岩などの石による清楚な女性像で知られており、自らのカトリック信仰に裏付けられた宗教的テーマの作品で独自のスタイルを確立しました。それらは崇高な美しさをたたえて他の具象彫刻作品とは一線を画するものです。とりわけ、長崎市に設置された《長崎26殉教者記念像》や《原の城》、《タミアン神父》は、彼の代表作といえるだけでなく、戦後日本の彫刻を代表する重要な作品といえるでしょう。

スワンのクリスマスケーキ ご協力ありがとうございました。



2014年12月、スワンのクリスマスケーキが109,011個の販売実績をあげることができました。全国のヤマトグループのみなさま、ご協力をありがとうございました。これからもみなさまに喜んでいただけるご提案をしていきます。



つたわる
フロント
読みやすさを追求した書体

